
コイビト 【statice】

乃空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コイビト 【static】

【Nコード】

N0358Q

【作者名】

乃空

【あらすじ】

華と永杜が描く、変わらずにそこに在る真実と愛の物語の始まり。真実は優しいばかりではないけれど、きっと哀しいばかりでもないというお話。

E* 日曜日の出来事

僕の恋人は可愛い。

無表情で何を考えているのか分からないとよく言われるがそこがまた可愛い。

感情表現が苦手で、よく殴る。しかし可愛い。

ただ少し変わったただけの、普通の恋人だと思っていた。

「華、またそんなの見てるの？」

彼女はグロテスクな洋画が好きだ。日曜日はいつも僕の部屋でそれを見ている。

高校時代から何も変わらず、付き合いはじめて早4年がたとうとしていた。

「見て、永杜。^{えいと}脳がこぼれてます」

嬉しそうにそういう華にできるだけ優しく笑いかけて、画面から目をそらす。

「楽しそうだね」

「楽しいです」

これが18禁でないことが不思議だ、と思いながら楽しんで観ている華を観察する。

こんなふうに感情をあらわにすることは極めて珍しい。

「永杜。永杜は華がもしロボットなら、どうしますか」

華は非日常的質問が好きだ。

この質問も今観ているテレビの中で自分の母親であるはずの人間を殺す主人公が実はロボットであるという設定から出てきたのだろう。

「次は夫だね」

「はい。わくわくですね」

わくわくですか、と思わず笑ってしまふ。

テレビの中では叫び声や何かがぶつかる音が響いている。それとは

真逆で明るい太陽が室内を照らし、のんびりとした空気にあくびが
でそうになる。

「華がもしロボットだったら僕を殺しにくるのかな」

膝を抱えてじっとテレビを見ていた華の目がちらつと僕を見てまた
すぐにテレビに戻された。

部屋には華が買ってきたドーナツの甘い匂いが漂う。チョコのドーナツは華がかじったままおかれている。それを手に取り食べてみる。
想像以上の甘さにすぐコーヒーを口に流し込んだ。

「甘いですよ、それ。永杜、甘いのが苦手なのに」と華が笑う。

「食べる前にいってよ」と僕はもう一杯コーヒーを淹れにキッチン
へと向かう。

その僕の背に華の柔らかな声が聞こえた。

「食べる前にいうと永杜は食べないでしょう？」

ポットのボタンを押すと熱い湯がこぼこぼと音を立てて落下してカ
ップに入った。

その湯にインスタントコーヒーの粉が溶ける。思いのままにコーヒ
ーが出来上がり、僕はまた華の隣に腰を下ろした。

テレビの中では顔の皮がはがれ金属がむき出しになった主人公が家
の外へ繰り出し、村人を襲い始めていた。

「華は人ですよ」

突然華は僕をまっすぐ見ていった。

「さっきの話？」

「はい」

「もしもロボットだったらの話じゃなかった？」

「そうでしたっけ」

「そうだよ」

華は首をかしげ、小さくうつむき、ずっとまた僕を見た。

「もし華がロボットで永杜を殺せという命令が出されたなら従うと
思います」

「従っちゃうんだ」

「ロボットですから」

「まあ、そうなるよね」

機械はそういうものだ。ボタンを押せばお湯が出る。それと同じ。
「けれど」

少し寂しいなと思いテレビに目を移した僕を呼ぶように華が声をこぼしたので僕はうつすらと微笑みを浮かべる恋人に目を向けた。

「華は人間ですから。命令されても従いませんよ」

華は自分を人間だと強調した。命令に従うだけの機械とは違う。食べる前に言つてよといつても、決して従わない人間。

「フィオじゃなくて、ティオでよかったです」

付き合つて4年がたとうとしていたその日、彼女の眼は何かいつもとは違う色をしていた。

「え？何？」

「人間化された機械じゃなく、機械化された人間でよかったです」

「にんげんか・・・きかいか？」

華は哀しげな目を僕に向ける。

「時は満ちたそうです。調査は終わりだといわれたのです」

僕の愛しい恋人はとても切なそうにさういうと暖かいその手で僕の手を握った。

相変わらず暖かな春の日の昼下がり心地よく、あくびをしそうになるほどのどかだった。

部屋はドーナツの甘い匂いとコーヒーの香が混ざり合っている。

「調査？」

「華は永杜を殺せという命令がでも従いませんが、連れてこいという命令には従うつもりです。桜井永杜、私は貴方にお願ひがあります。私と一緒にベースメントポリスに来てください」

少し変わった僕の恋人は、きっと少し変わっているだけだと思っていた。

確かにホラー映画が好きだったり、時折意味も分からない攻撃をしてくることはあるが、それでもただ平和な世界に生まれた僕と同じただの人間だと。

なんでもない日常が突然とんでもない日常に変化する。

今がその時なのだと僕は愛しいばかりの恋人の黒い瞳を見つめているだけだった。

E* 日曜日の出来事（後書き）

ちよつと暴力的でホラーが好きで虫に強い少女が大好きな乃空です。
感想などいただけると喜びます（私が）。非常に喜びます（私が）。
週に一度のまったりペースで更新予定です。
これからもよろしく願いします^^

H* 握られた手

その日はただの中間検査だと思っていた。

「H006」

白で統一された無機質な廊下を歩いている私に聞きなれた声がかかる。

「黄昏。どうかしましたか？」

振り返ると白衣を着た背の高い男の姿を確認し、その男の名を呼ぶ。人懐こく、常にへらへらと笑ってばかりいる女たらしの彼だが、私の父である。私の本当の父ではないが、私を機械化した創作者であるから、父という形をとっている。

「検査は異常なかったみたいだね」

「はい。いつも通りです」

「よかった。ちょっと話があるんだ。とても大事な話だから、俺の研究室によっていって」

珍しく真剣な顔で黄昏はそう言った。

そして静かな研究室でゆっくりと一つのデータを私の前に出して、私に最後ともいえる命令を下した。

「機械化人間とはその字のとおり、機械化した人間のことです。その人間をベースメントポリスではティオと呼びます。どれだけ命令に忠実に従えるか。どれだけ感情を制御できるか。どれだけ無感になれるか。それに付け加え、計算能力などの知能面での審査を通った者だけがティオとなります」

ただ驚くばかりの永杜に私という人間の存在をインプットされた文字をただ読み聞かせていく。

「私は5年前、ベースメントポリス第五地区総合研究室T6で黄昏によって創られたティオです」

感情を制御することと無感になることにおいては他のティオ候補よりもはるかに優秀な成績で、過去最高のティオだと言われている私の声が、かすかに震えている気がした。

永杜のそばに在るといつも、ティオとしての誇りや自信がなくなる。仕草や言葉や表情1つに簡単に心が揺れ動いてしまう。それが分かつているから、黄昏から命令を受けた時、不安になった。

「調査、観察を目的に永杜に近づきました」

つい先ほどまで騒がしかったテレビはテロップが流れ、静かに文字が流れていく。永杜が食べた私のチョコドーナツも、永杜が飲んでいたコーヒ―も、何もない空間に永杜は1人座っているように見えた。

そしてゆっくりと息をすると、驚いていた目を私からそらして、口を開いた。

「そっか」

私の握る冷たい永杜の手がいつ振り払われるのかと怯えていた私に、優しい永杜の声が降ってきた。

「よくわからないけど、なんとなく分かってたような気がする」
分からないけど分かつていた、という言葉のほうがよくわからない。そう思い首をかしげると永杜はいつもの笑みを浮かべ、何を映しているのか分からない瞳で私を見ると、大きな手で私の両手を包み込んだ。

「そこにいつでも僕は大丈夫なのかな。明日は学校もあるし、バイトもある。殺されたりしない？痛い思いをしたりとか、しない？」

いつだったか。私も黄昏にそう尋ねたことがあった。

もしも永杜をここへ連れてきても、何もしないかと聞いた。彼が嫌がるようなことを、彼が傷つくようなことをしないかと。もしもそんなことがあるなら私は命令に背くつもりでいた。

しかし、黄昏は馬鹿にするように私の頭をなでて笑った。

『華はよほど彼が気に入ったんだねえ。そんなことしたら俺の身に

危険を及ぼしそうな言い方だ』

『及ぼします』

『そうか、そうか。でも大丈夫だからね。軽くデータをとって、ベ
ーメントポリス内を案内するだけだよ』

黄昏は永杜に似て嘘が下手だから、きっとそれは嘘ではないだろう
と私は理解した。

「大丈夫。黄昏は何も危険なことはいらないと言っていました。たと
えもし永杜に危険が及ぶようなことになれば、私が永杜を守ります」
私の手を払いのけることもせず、こうして握ってくれる優しいばかり
の永杜が傷つけられるようなことがあるなら、私は決して無感で
などいられない。感情を制御するなど不可能だ。

機械化されているからといって、機械そのものになったわけではな
い。私は永杜にそう教わった。

「じゃあ、でかけようか？DVD返して、それからでもいい？」

人の皮を被った機械が暗い室内を徘徊しているメニューを指差す永
杜に必死の思いで訴える。

「途中までしか見てないです」

「また見るの？華つて本当に好きだよ、こういうの」

もう不安なんてものは何もなかった。嫌われたらどうしよう。軽蔑
されたらどうしよう。

そんなみつともないようなことばかり考えていた私に永杜はなんで
もないように手を握って笑ってくれた。

好きだと言ってくれたのは、永杜だった。

私は今まで一度も好きだと伝えたことはなかった。それはどこか意
地を張るような、機械化された人間であるというプライドが邪魔を
しているからだろうか。

今、永杜がそれを求めてくれたら言えるような気がした。
全てを捨てて、そういえる気がした。

「永杜」

「ん？」

大好きです。

そんな伝わるはずもない言葉を心の中でそつと告げる。

一瞬、永杜の顔がぱつと赤くなり、それを隠すように永杜が笑った。
「僕も」

普通だと思っている普通ではない彼の言葉に私のほうが驚く。

「私何も言っていないです」

「え？あ、じゃあ空耳かな」

さつきよりも赤くなつて永杜は私から顔をそらした。

きつと彼にはしっかり聞こえていただろう。私の中にあふれんばかりの想いを。

『もうすぐ覚醒するみたいなんだよ、桜井永杜。だからそろそろここへ、つれてきてほしいの』

そう、私の耳の奥にはそれを示す黄昏の声が響いていた。

E* 隣の陽だまり

「ベースメントポリスってさ、会社とかじゃなかったんだね・・・」
華に手を引かれるままにやってきた小さな喫茶店の奥にある小さな
クローゼットのような木箱に2人で入ると、ガゴンという妙な機械
音がした。まるでエレベーターの中にいる感覚に驚いたまましばらく
ゆられた後、開かれた扉の向こうには華がベースメントポリスと
呼ぶものがあつた。

「ベースメントポリスは地下都市のことです。正確に言うところには
ベースメントポリス」、第四地区と第五地区の境にあるベースメン
トポリスの入り口です」

はあ、とため息しか出ない。50メートルはありそうな壁は永遠と
地平線まで続いているように思える。

地下都市という言葉にいよいよ意味が分からなくなってきた。

真っ白な鉄板がまるでドームのようにすべてを覆っている。空はな
く、そこにはその鉄板が宙に浮く明かりに照らされている。

「ここが」

「人口は現在5千万人と少ししかいません。面積はほぼ地上の日本
と同じくらいだと聞きました」

「本当に都市・・・なんだ」

「はい。永杜に嘘はつきません。」

のんきに笑っている華にはは、と乾いた笑をこぼす。何も華が嘘を
ついているのではないかと疑っているわけではなく、ただ信じがた
い現実を目の当たりにして、それ以上の何もいいようがないだけだ
つた。

「入りますよ。これは永杜のパスカードです」

いつのまに撮られたのか、顔写真と指紋が写された小さなカードに
紐を通し華が僕の首にそっとかけた。

「似合ってます」

何故か嬉しそうに笑って華は僕を無意味におだてた。

パスカードが似合っているにも嬉しくはないが、華が褒めてくれるのは嬉しい。

やはり繋がれた小さな手はぐいぐいと僕を引いて縦に細長い鉄格子の門の前に行くと、門の脇にいる門番らしき男に手を振った。

「・・・仲いいの？」

「兄妹みたいなものです。あの人は黄昏に創られたフィオL03」「フィオって」

「人間化機械。門番をするために創られた中身は機械、外見は人間です。夕風はL03を不良品だと言っていました」

また新しい名前が出てきた。L03と呼ばれたのは門番のことだろう。遠くてはつきりとは見えないがにこりと笑って手を振りかえしていた。夕風というのはわからないかと考えていると、ギイと重い音が響き門が開かれた。

「L03は優秀なフィオだと私は思います」

華が門をくぐり終えて、また門番のほうへ振り返ると手を振ってそう小さな声で言った。

「あんな遠くからちゃんと私を認識し、永杜を認識します。今まで一度だって間違ったことはありません」

それならこの言葉もちやんと聞こえているといいな、と思った。機械化されて、感情を表現するのは苦手な華の哀しげな想いが僕にはわかった。

「そうだね。僕もそう思うよ」

そういうと華が少し嬉しそうに僕を見て小さく頷いた。それからまた手を引いて広い通路のようなところを歩いていく。門の内へ入ると遠くにまるで城のような建物が見えた。白い空に届きそうなほど高い城だ。

「あれは？」

「あそこはメインタワー。限られたごく一部の人が入ることが許されていない場所ですよ」

「華は入ったことあるの？」

「一度だけ、黄昏に連れていつてもらったことがあります」

華の表情を見るとあまりいいところではないらしい。無表情の奥に少しばかりの恐れのような感情を見た気がした。

「永杜、入ってください」

「あ、うん」

促されるまま華の開いた扉の向こうへ踏み込むと、そこには真っ白な明るい廊下がやはりずっと遠くまで続いていた。

「すごいところだね」

「無機質なところでしょう？廊下はどこもこんなふうになっているので迷子にならないように気を付けて」

「ならないよ」

「永杜はなりそうだから心配です」

昨年の夏祭りは確かに華とはぐれて、元の場所に戻るのも苦労したが、あれを迷子と呼ぶのは少し嫌だ。

そんな僕に華は言った。

「手をつないでいれば大丈夫ですよ」

あの日も今年の夏祭りも同じことを言われたのを思い出す。

「子供じゃないよ」

「知ってますよ」

華がおかしそうに笑って手を引いた。

何の不安も感じないのは華がこうして手を握ってくれているからだろう、と僕はそつと握り返す。

本当はこんなわけのわからないところへ連れてこられて、気がどうかしそうなのに、華がいるから平気でいられる。いつもそうだ。いつも助けられるのは僕で、いつも好きなのも僕のほう。

『調査、観察を目的に永杜に近づきました』

ふと、華の言葉を思い出す。今まで付き合っていたのも、全て義務だったのかと思わずにはいられなかった。裏切りと呼ぶこともできそうなものだが、僕にそんなことができるはずがなかった。

「暖かいね、華の手」

「永杜が冷たいんです」

この僕の冷たい手を温めてくれる華になら裏切られてもいいかなと思ってしまうのだ。

白い廊下を永遠と歩いていく。華がそつと僕の隣に並んだ。小さな彼女の細い肩が僕の腕に少しあたる。

そこに熱が生まれる。

「熱くないですか？」

「熱くはないよ」

「そうですね。まあ、熱くても離してあげませんけど」

じんわりと体中に広がっていく熱が心地いい。

どこまであるのか分からない真っ白な廊下を、華の小さな歩幅で歩いていく。

たとえそれが義務でも、華の意思がそこになくとも、ずっとこうして歩いていられたらいいのに思ってしまうのだ。

「よかった」

一瞬春風が華から吹き込んできた気がして華を見ると、頬を赤く染めて小さく笑っていた。

それだけでいい。

こうして華の手を握り、華が笑って、二人で歩いていられるなら僕はそれでいい。

そう思いながら僕は何の音もしない真っ白な廊下を華の隣でゆっくりと歩いていた。

「永杜」

「ん？」

「永杜がおしゃべりするからです」

「何が？」

「迷子になってしまったのですよ」

「え！？」

H* 彼女の探し物

昔から技術面ではあまりいい成績を残せず、訓練を受け始めたころは人並み以下だと多くの研究者に見放されていた。その中で唯一私を引き受けてくれたのが、その頃すでに天才と呼ばれていた黄昏だった。

誰もが認める落ちこぼれを、誰もが認めざるを得ない最高傑作にしてしまう男。それが黄昏だ。

「今日の午後4時には戻ってくる二」

黄昏の研究室には見た目は幼い7、8歳の少女の姿をした人間化機械フィオの「K17」がいる。

なんでも助手をしているらしいが、たいていソファに座って研究を眺めているか、寝ているかのどちらかしか見たことがない。

「L03の点検はK17がしているのですか？」

「黄昏先生が月に1度している二。今月はもう終わった二？」

語尾に『二』とつくのは黄昏の趣味だといっていた。

「で、あの男がああ桜井永杜二？」

迷子になったものの何とか研究室にたどり着くと、永杜は研究室の中をぐるぐると見渡していた。

天才とも呼ばれる黄昏の研究室は総合研究室の建物内だけで3室あり、そのうちの1番小さなこの研究室でも他の研究者や学者に比べるとかなりの広さがあつた。

「はい」

「桜井永杜のデータ見る二？」

「黄昏は見せるようにとK17に指示しましたか？」

「してない二」

フィオは人間に似て時折意味もなく勝手な行動をとることがある。

「では見ません」

「そうか二？じゃあもう1度検査する二？」

K17は小さな体でソファから飛び上がって研究室を歩き回る永杜のズボン小さな手で握りしめると私のほうを見てそういった。

「黄昏が検査するようにと言いましたか？」

きつとそんなことを言うはずがないと聞き返す。ついこの間中間検査を終えたばかりで異常はどこにも見られなかったのに、そんなこと。そう思っていた私にK17の子供っぽい無邪気な笑顔が向けられた。

「桜井永杜の目の前で検査を受けさせるようにと言われた二」

「検査？」

永杜は心配そうな顔で私のほうを見る。何も危険な検査ではなく、能力の高低を測るだけなのだが、黄昏の考えにはいつも一歩及ばない。

彼はきつと私が永杜の前ではほぼ無能に等しいことを知っているのだろう。

「・・・黄昏の命令なら仕方ありません。永杜はガラスの向こうで見えてください。」

言動行動共に軽はずみで、何を考えているかさっぱり読めない男、黄昏のことだ。

ただ自分の作ったものに欠点を見つけて楽しみたいのだろう。

他の誰にも負けないものを作ってしまう人間というのは、自分で自分の欠点を見つけ出すほど暇なのだ。

「平気・・・？」

「半年に1度は受けさせられます。平気ですよ」

痛くもなければ苦しくもない。ただ心の中に何かが入り込んでくるあの感覚はいつになっても慣れない。

座りなれた茶色の椅子に腰かけ、この世界ではあまり見慣れない蛍光灯が何も無いこの部屋をぼんやりと照らしている。壁も天井も床も真っ白で距離感をつかみづらい。

「はじめ二」

小さな窓の向こうからK17の小さな手が揺れるのが見えた。

その瞬間バチンという音とともにそこに暗闇が出来上がる。まずは視覚聴覚などの五感の検査だ。

暗闇の中から飛んでくるものなるべく椅子に座ったままよけるという簡単なもの。

それが終わると暗闇の中から声が聞こえてくる。いつもなら暖かい春の風に湿った雨の匂いが混じったものがやってきて、それから徐々に視界が開けるとそこは一番好きな丘の上なのだ。

そしてそれはある日の私の記憶であり、私の中にある全ての記憶のうち最も鮮明に記憶され、最も感情を揺らす記憶なのだ。

雨が降り始めると遠くから優しい声が聞こえる。私の名を呼ぶ母の声だ。それに続いて父も私を呼んでいる。

何度も何度も見ているその記憶に、いつも心の奥にあるものがふつふつと蓋を開けそうになる。

けれど私は黄昏によって創られたティオだけあり、決してその蓋が開くことはないことを知っている。

母の腕に抱きしめられ、父の頬にキスをして、それから家族仲良く車に乗って家に帰る。

たとえその途中に私の人生を変えてしまった事故が起こり、私の大好きだった家族が死んでしまっても。

ふと小さな窓の向こうに永杜が見えた。

一瞬だった。

固く閉ざしていた蓋の内側ではなく、外側から全てを包み込むような優しい風によって、その箱はカタンと簡単に壊れてしまった。困いを失くした箱の中の黒いものがどつと外へあふれ出るようなそんな感覚に瞬きをした私の頬に、何かが伝った。

感情制御不能、という警告音が胸の奥で鳴り響く。

無感、感情制御、そのどちらも私が最も得意としていた試験だ。

それが永杜の顔を見た瞬間、驚く間もないほどに、内からではなく外からその囲い自身を奪われた。

「華！？」

永杜の声が窓の向こうでくぐもって聞こえる。

私は永杜に抱きしめられた時もこうして同じように泣いたのだ。人の持つ暖かさを、触れ合う肌の柔らかさを、私は決して忘れられない。

大好きな人を失う痛みを、永杜は私ごと抱きしめてくれる。

ガンと鈍い音が響き、無理やり開かれた扉の向こうから永杜が私のもとへ駆けて来た。

椅子に座ったままの私を大きな両手で腕の中に引きこむと、つぶれそうなほどに抱きしめられた。

あの記憶の映像は私にしか見えないもので、きっと永杜は何があったのかわかるはずない。

それでも彼はいつだって、私が抱きしめてほしいときに、必要なだけの強さで抱きしめてくれる。

「平気だっていったじゃないか」

怒るような口調で抱きしめたまま永杜は言った。

私だって平気だと思っていた。永杜の存在によって多少の誤差はあれど、まさかこんなことになるとは思っていなかった。

「想定外です」

永杜のそばに在るといつも想定外のことになる。

「永杜がいなければ何も辛いとも苦しいとも哀しいとも感じません」

「僕のせいってこと？」

永杜が怒っている。

「いいえ」

永杜がいなければあの感情はずっと箱の中で波が弱まるを待っていただろう。

箱が壊れ、溢れることなどなかっただろう。

けれど、今痛いほど抱きしめてくれる永杜の温度も肌の感触も、こんなにも幸せに感じることなどできなかっただろう。

「永杜のおかげです。きっと何も感じないなんて不可能なのです。それに痛みを抱えてでも、感じていたことがたくさんあります」
生きることに死なないことが違うように。

今生きて、私を抱きしめてくれる永杜へのこの感情さえ抑え込んでしまつてまで、最高傑作でいることに意味はあるのだろうか、今更ながらそう思った。

消えない痛みを抱いて生きることになったから、私はこの道を、テイオになることを選んだ。

機械のようになることで、少しでも楽に生きられたらと思ったのが始まりだった。

しかしそれはいつしか黄昏のためになるなら、黄昏が喜ぶならと意味をすり替えていた。

そして私は永杜に出会って自ら捨てたはずのものを、今は大切に拾い集めようとしている。

「すごいね、桜井永杜。本当に想像以上だ」

突然、思いもしない声が小さな部屋に響き、私は永杜の腕の中から扉のほうへ目をやった。

そこにいたのは、こうなること全てを見越していた天才、黄昏だった。

「俺の優秀なテイオをここまで破壊できるなんて、愛の力？」

ふざけたことを言いながら彼は笑っている。

ぱらぱらと今取ったデータに目を通した黄昏が優しい目をして私を

見た。

「だから言ったでしょ。完璧なティオは天才と呼ばれる俺にも創れやしないって」

それは昔、まだ私が幼い少女だったころ。多くの研究者が私を見捨て、そして黄昏が私を拾ってくれた日の言葉だった。完璧なティオになれば、父や母を亡くした痛みなど消し去ることができ、何にも哀しみを感じずにすむのだろう。そう考えた私は彼に頭を下げて頼んだ。どんなことでもするから、完璧なティオにしてください、と。そんな私に彼は馬鹿にしたように笑った。

『無理無理。あのね、完璧なティオは天才と呼ばれる俺にも創れやしないんだって。それでも努力するなら、君の望むところまで連れて行ってあげてもいいけど。』

その時の私にはそれがただの謙遜にしか聞こえなかったのだが、あの時から彼はすでに何もかもを超越した場所に立っていたのだろう。『きっと華ちゃんは別の答えを見つけることになるよ。最初から機械と人は違うんだから』

そのうえで私をティオにして、永杜のもとへ送ったのだ。

こうなることを分かっていた。

「名前返そうか？」

私がティオである意味はもうなくなった。名前を返すということは私がティオではなくなるということを示す。それでもいいかもしれない、と思ったとき、私を抱きしめていた永杜の目がじつと不安げに黄昏を見ていることに気付いた。

『華！？』

耳の奥に私の名を呼ぶ永杜の声が聞こえた。

「名前、いりません。黄昏はH U O 6と呼んでいてください。私には華と呼んでくれる人がちゃんといますから」

永杜だけがそう呼んでくれていれば、それで十分だと思った。

そして心のどこかで、父である黄昏の『H U O 6』という声が優し

く響いて、それが無くなるのも少しばかり寂しい気がしたという理由もあつたかもしれない。

「そう」

黄昏が嬉しそうに笑う。その言葉にふつと永杜の力が抜けたのが分かった。

黄昏は私にとって本当の父ではないが、父なのだ。ずっと遠くで私が自分の答えを見つけて生きることを見守ってくれた父なのだ。永杜のことだから、きっとそれをうつすらと感じたに違いない。

気が付けばちゃんと私を想ってくれている人がたくさんいる。

どこの世界も生きにくいけれど、こんなふうに抱きしめてもらえるなら、今度は大切な人を私が抱きしめてあげられるように、たくさんのことに泣いて、たくさんのに笑って生きていきたい。

E* 居場所なき真実

今僕の目の前には、愛しい僕の彼女を機械化したという黄昏と呼ばれる男が座っていた。

華に向ける瞳の優しさに僕は自分の中に描いていた黄昏という存在との違いを感じた。

華がL03に会いに行くといいだしK17と二人で出かけると、研究室内は僕と彼の2人になった。

「黄昏といいます。H06からどこまで聞いているかわからないけど、何か聞きたいことある？ あつたらどんどん聞いて。どんどん答えちゃうから」

軽いな、という印象を与えられる。

人懐こいというか人見知りなどという言葉など微塵もなさそうな男だ。「本当に何でも聞いて、答えられることは全部答えてあげるからね。つていうか聞いてくれないと罪悪感にさいなまれちゃう」

コーヒーにばっさばっさと白い砂糖を入れていく黄昏さんの言葉に僕の口は瞬間的に開かれた。

「甘くないですか、それ」

僕は甘いのが苦手だからだろうか、見ているだけでも胸やけがする。

「ああ、永杜君は甘いのが苦手だっけ。俺はねえ、甘いものに目がないんだ。あと女の子も大好き」

「そんな気がします」

僕よりも大人っぽい彼は笑わなければ大人の男に見えるのに、口を開くとだめだなと思わず笑ってしまう。

「永杜君、何で俺が罪悪感を感じるのかとか、君のことを知ってるのかとか、聞かないね。気にならない？」

砂糖の中にコーヒーを溶かしたような黒い飲み物を口の中に流しこしている。

気にならないわけではない。聞きたいことはたくさんある。けれど

突き詰めていくと最も聞きたいことが零れてしまいそうで怖い。他のことなどどうでもいいと思うほど、ずっと心の奥底にある疑惑が疑問が溢れそうで怖い。そしてその問いに対する答えを聞くのが怖い。その答えは決して華以外の口から聞くべきものではないと分かっている。華の口から聞くことを最も恐れてしまう。

「本当に聞きたいことは、聞きたくないことです。最後にはそこにたどり着いて、僕は答えを聞いてしまうと思うから、黄昏さんが話したいことを話してくれればそれでいいです。確かに僕は何も知らないのに、黄昏さんは僕のことをよく知っているのは悔しいですけど」それに罪悪感を感じることだってわかる。人のプライベートな部分を探らせていたのだから当然といえば当然だ。けれど僕は臆病だから、知らなくてもいいことは知りたくない。

「優しいね」

「小心者なだけです」

「優しいよ。ありがとう、H U O 6を責めないでいてくれて」

黄昏さんはあの優しい目を僕に向けて微笑んだ。僕の父は無口で静かで黄昏さんとは違うけれど、どこか同じ暖かさに包まれているような気になる。彼は僕が一番聞きたくて、聞けない問いを知っている。

知っているのにそれを僕が問わない限り、決して自ら話はしない。そんな優しさを感じた。

「俺が君の調査をしていた理由から説明するね」

半分ほど飲まれたコーヒーのなかに白い粉が揺れていた。溶けきれずに残った砂糖が居場所を探している。口の中に甘さが押し寄せ、また胸やけになりかける。

「真実を見る者と真実を語る者と真実を聞く者がこの世界には存在する。地上世界でそれを知っているものがいるのかどうかはまだ調査中だけど、ベースメントポリスでその3人を知らない者はいない。いつか君も会うことになると思うけど、ベースメントポリスでは未来を担う大切な柱なんだ。で、ここまで話して永杜君の中に何か、

思い浮かばない？」

ただじつと聞いているだけだと思っていた僕に突然黄昏さんが問いかける。思い浮かぶとは何のことだと心の中を探してみる。僕の知らない信じられない地下世界。そこには3人の柱となる人物がいる。その3人が未来を担い、この世界の軸となっている何かを支えている。

ふと小さく息を止めた。目の端に溶けきれなかった砂糖が残るコーヒーが映っている。

「未来を担うその3人が」

溶けきれずに残った砂糖が黒い液体の中に居場所を探しながら揺れているのと同じような気がした。

心の中に溶けきれず、残ったものが現れる。

「この世界の軸となっている何かを支えている」

ただ心の中にあるその溶け残りをそつと言葉にして黄昏さんに伝える。僕がまだ知るはずもなく想像としかいいようのないそれは、僕の中で確固たる事実のように溶け残り。

「俺はまだ何も言っていないよね。3人の他に軸となる者がいるとも3人がそれを支えているとも言っていない。それでも君は俺の中にある真実に触れた」

そつと自分の胸に手をやる。ドクンと強く心臓の音が響いた。知りえもしないことを知っている自分が恐ろしくなった。黄昏さんの言葉が何を意図しているのか明確に伝わってくる。

「真実に触れる者、それこそが3人が支えるこの世界の軸であり、君なんだよ、桜井永杜」

本当は黄昏さんが口を開いた時から知っていた気がする。全てが当然のように納得できてしまう自分が怖かった。遡れば華が時が満ちたといった時から、なんとなく漠然と遠い未来にこれを予期していたような気さえする。

「覚醒していない状態でこれだよ。本当にその時が来れば君は、目を閉じて耳をふさいでいても、君の心が触れたものの中にある真実

が全て分かってしまう。」

信じられないはずのことが、あたかもずっと昔からそうであったことのように受け入れてしまえる。

黄昏さんが居場所を探す砂糖さえ一緒に飲み込んでしまうように。何の違和感もなく、そつと事実として消えていく。

「だから君を調査していた。君はいたって普通な一般家庭に育った青年だよ。だから地上世界での生活を捨てるわけにもいかないだろうし、君自身あちらの世界で生きたいと思うのかもしれない。だけれどこつちの世界も軸がなければ未来が消えてしまう危険もある。本当に困っちゃうよね」

どうすればいいか、黄昏さんはその答えを持っていないようだった。僕は明日から大学がある。バイトだってある。来月の連休には実家に帰るからと電話もいれてしまっている。そして僕には今まで生きてきた世界や交わってきた人を失う覚悟などありはしない。

「今の統都もそれを分かってるから、無理に引き止めたりはしないつもりみたいだしね。けど、もう無関係には生きられないことは分かかってほしいんだ。俺が生きているこの世界には5千万人をこす人間が生きている。人間だけじゃなく動植物も。この世界の未来がどれほど大切なものか今の君に分からなくても、壊させるわけにはいかないこと。だからゆっくり一緒に答えを探してほしいんだ」

まだここへ来てきつと3時間もたっていないだろう。この世界でかわったのは門番のL03と黄昏さんの助手だというK17、それから目の前にいる黄昏さん。たったそれだけだ。

だから僕にはまだわからないのかもしれない、と黄昏さんは哀しそうな目で必死に訴えてきた。

白いばかりの廊下や永遠と続いていそうな大きな壁。なんの音もないこの世界に5千万人という計り知れない命がうごめいているなんて信じられないほど無機質な部屋の一室で、僕の中にはやはり白い砂糖が溶け残る。

「もうここは僕にとって大切な世界です。華の大切な人がいて、華

が時を刻んだ場所で、きつと彼女にとっても黄昏さんにとっても大切な世界だと思うから、大切にしたいです。僕にしなければならぬことは絶対します。僕にできることもできる限りします。」

そんな簡単な考えはきつと何も生みやしないと分かっていて、それでも僕の中にある何かがそういわせた。

「きつと大丈夫です。何もかもうまくいく。僕がそう思っているならもしかするとそれが、真実かもしれないでしょう?」

僕がそう言って笑いかけると、きよとんと驚いた黄昏さんの眼が僕をじつとのぞきこんで、そのあとふつと吹き出すように笑った。それから小さく「そうだね」と言つて、彼はまた笑った。

僕は多くのことに対してあまり深く関心がないのかよく、それでいい、と思うことがある。

華さえ笑っていればいい。華の隣にいられたらいい。こんなふうに誰かが不安を消し去っていられるならそれでいい。本当はそれでいいなんてことはないはずなのに、そう思ってしまう。

たとえそれが僕の心が触れた黄昏さんの中にある真実に似せた想いだとしても、僕の中にそれが溶け残っているのだからきつと真実だろう。そんなふうにいる樂觀主義な僕が世界の軸だなんて、どのみちこの世界の未来は終わっているのではないかと僕も思わず笑ってしまった。

H* 真実を抱く偽り

研究室に戻るともう黄昏の姿はなかった。きっと全てを語り終え、他の研究室に出かけたのだろう。私を困ったような目で見つめる永杜に、何かを言おうと口を開いても何も言えなかった。

K17も別の施設に用があるといって途中でわかれてしまったために、研究室内は永杜と私の2人きりで静かだった。その沈黙を破ったのは永杜でも私でもなく、信じがたい声だった。

「貴方が永杜？桜井永杜？」

扉の前に立っていたのはここに来るはずもない女、夕風だった。

私の体は急にこわばり、急いで永杜と夕風の間壁を作る。自分でも不恰好なほど小さな壁だが仕方はない。私の身長は16のときからほとんど伸びていない。

「何をしに来ましたか、夕風」

そんな私と違ってスラリとした夕風の体系は年頃の男達がこぞって好む胸あり谷間あり肉なしのナイスバディだ。羨ましくはないと言えは嘘になる。そして研究者たちの間でもマドンナ的存在になるこの女は白い肌に大きな目、綺麗な鼻筋をもつ美人でもある。羨ましくはないと言えは大嘘になる。

「H U O 6 に用はないわ」

私は夕風があまり好きではない。というかむしろ嫌いだ。いつだって人を蔑み馬鹿にするあの冷たい目が嫌いだ。兄である黄昏とパーツはよく似ているのに、奥底にある何かあまりに違いすぎてどうしても好きになれない。

「永杜、貴方に用があるの」

「永杜は夕風に用はありません」

敵わない敵を目の前に声が震えそうになる。怖くても永杜を渡すわけにはいかなかった。

「怯えちゃって、これで最高傑作なんて笑っちゃう。さすが天才の

黄昏ね」

嫌味だということはすぐにわかる。昔はこの言葉にずいぶん振り回され、黄昏の迷惑にならないように懸命に努力した。しかし黄昏はそんな私を抱きしめ、頑張りすぎないようにとよく遊んでくれた。本当の父のようであり、年の離れた兄のようだった。夕風の言葉に言い返そうとする私を黄昏は哀しそうな顔をした。どれほど夕風が黄昏を傷つけたとしても黄昏は決して彼女を傷つけるようなことはせず、ずっと遠くで彼女を守っていた。それこそ、父ではなく兄として。時折兄でもなく、暖かな目で。

「永杜を渡して」

「嫌です」

「命令にも従えないのね、無能なティオ」

「黄昏の命令以外には従いません」

じりじりと近づく夕風に体が自然と逃げ腰になりゆっくり下がってしまふ。黄昏の大切な人を傷つけることなどできない。傷つけることもできずに大切なものを守るのは難しい。

もう1歩下がったときトン、と背中に永杜がぶつかった。

「華を苛めないでもらえませんか。僕の大切な恋人なんで」

恋人という言葉に小さく胸が音を鳴らした。

「恋人って・・・、H U O 6と？」

驚いたような声がすつと笑いにかわる。

「黄昏は調査対象の貴方にティオを送って」

「やめてください」

明らかに私の声は震えていた。全てを話そうとする夕風のをさえぎるためにいつもより大きな声を出したのがいけなかったのかもしれない。感情を露わにすることなど許されない私に夕風の冷たい言葉が降ってくる。

「調査を進めるために、恋人になれとH U O 6命令したのよ」
もう声が出ない。喉の奥で息が詰まる。

そんな私の強張ったままの体をそつと包み込むように永杜が私の肩

を腕の中に引き入れた。

「それでも俺が華を選んだんです」

永杜のまっすぐな言葉が、ずっと胸の奥に響いてくる。

いつか話さなければと思っていた。本当は恋人になるようにと命令を受けて恋人になったこと。

ずっと永杜をだましていたこと。

きっと永杜は気付いているだろうけれど、私の口から謝らなければならぬことだ。

そんなふうに使っていた私をいとも簡単に抱きしめる腕が暖かくて、夕風がいることも忘れて泣きそうになった。

「桜井永杜。いずれ私のところへ来てもらおうわ」

そういった夕風は私のほうを一瞥し、すぐに研究室を出て行ってしまった。

カツカツとヒールの音が耳に煩く響く。

夕風がいなくなりました急に静けさを取り戻した研究室の中で、私を抱きしめる永杜を振り返る。

「平気？」

永杜の優しいばかりの声がヒールの音をかき消す。

永杜のほうが平気ではないだろうに、哀しみを隠そうと瞳が細くなっている。

ごめんなさいとありがとうを言わなければと口を開くがうまく言葉にならない。

そのもどかしさを表すように私の右手は永杜のシャツをぎゅっと握りしめていた。

「僕は気にしてないから。もし少しでも華が僕の隣にいることを楽しいと思ってくれているならそれで十分だからね。それでも華が恋人をやめたいというなら、僕に止めることはできないんだけど」

恋人になるなんて簡単なことだと思っていた。命令に従い、愛し合うふりをしていればいいのだと思っていた。ただ優しく囁き合っていればそれでいいのだと思っていた。

「永杜」

けれど私は彼の名を呼び、その手を握り、笑いあうことを知った。怖いものが苦手な永杜の怯えた顔が可愛いことも、朝が苦手な寝起きはぼうとしていることも、本当は友人と騒ぐのが少しだけ苦手なことも、大きなムカデは平気なのにだんご虫だけは触れないことも、それでも私が怖がるとちゃんと捕まえてくれることも。

嘘じゃない感情がたくさんあった。

だからたとえ始まりが偽りでも、今はここに溢れだしてとめられないほどの想いがちゃんとある。

「私は人間です。人は嬉しいも哀しいもちやんと感じます」

それを今伝えたいと思った。

今まで1度たりとも言葉にして伝えたことのない言葉をしっかりと伝えなければと思った。

永杜の哀しげな目に、どうか私の心が映りますようにと願いを込めて。

「私は永杜が大好きです」

心の中でつぶやいた言葉が、永杜にはちゃんと聞こえていた。

真実に触れる者である彼なら、ちゃんと私の心の中にある感情に気付いてくれる。

「やっぱり」

永杜の目がぱちりと瞬きをした。黒く底のない瞳に吸い込まれそうになる。

心の中にするすると溶け込んでくるような感覚が、永杜から流れ込んでくるようで心地いい。

「ちゃんと聞こえていたよ。僕も」

ぎゅ、と抱きしめられる。

「僕も華が大好き」

嘘ではない温度がある。人間である故の想いがある。人でよかったと思う瞬間がある。

大好きな人と同じときを生きて、年を取っていくことができる幸せ

を私は永杜に教えてもらった。

『よかつたら僕の恋人になってください』

白い雪の降った日だった。その日のことを思い出すと、すでに付き合う前から私はきつと永杜のことが好きだったのだと思った。それなら偽りの愛など初めからなかったのかもしれない。恋人になるようにという命令に従い恋人になったのが偽りで、永杜のそばにいたいと思ったあの心こそが真実だったのだ。

永杜のその言葉に体が急に熱くなったあの日。私は小さく頷くので精一杯で、何も言えなかった。だから今日は私の言葉で始めたい。

「よかつたら私をずっと恋人にしてください」

真実に触れる者である永杜はただ耳まで赤くして「はい」と笑ったのだった。

E* そこに在るもの

『よかつたら私をずっと恋人にしてください』

大学内のカフェで一人コーヒーを飲んでいる僕の頭の中で華が優しく笑っていた。

真実に触れるのは恐ろしいばかりでないのだな、と思えた。

その言葉からは暖かな春風が吹いてきて、それは時折華からあふれるそれと同じで、つまり華はちゃんと僕を恋人にしてくれていたという真実に触れた。

一番恐れていたことが、一番暖かなもので包まれて、もう不安なことなく何もなかった。

「にやにやして気持ち悪いんですけど」

どさつ、と僕の前に荷物が置かれ少し重い声が響く。その声の方向へ目を向けると、長かった髪が肩よりも短くなった照が立っていた。

「照、髪切った？」

「失恋したのよ」

失恋した割には落ち込み方が軽い。それでも少しは落ち込んでいるようで、小さくため息を漏らしている。照とは高校時代からの付き合いだが、彼女が失恋したなんて初めて聞いた。

「振られたの？」

整った顔立ちで誰にでも気さくに話しかける彼女を慕う男はたくさんいる。しかし彼氏がいたことはない。ただつくる気がないのだとばかり思っていた。

「違う。略奪失敗したの。彼女に噛みつかれちゃって」

噛みつくという言葉に本人は笑みを浮かべている。本当に失恋したのか疑わしいものだが、彼女を包む空気は確かに少しばかり寂しげではあった。

「え、あ、そう。大丈夫？」

「この気持ちを哀しいっていうのよね」

「照」

「というより悔しいのほうがあつてるかも」

確かにそんな感じだ。しかも何故だか僕を睨み付けてくる。これは気のせいではなくやつあたりだろう。

「髪の毛、似合ってるよ。大丈夫だって。次がある。男は1人じゃない」

そういつて微笑みかけると、照が口元をそつとゆるめて笑い返してくれた。

少し元気のない笑顔だが、見慣れないそれは新鮮で、そこに人間らしさを感じた。

「永杜のそういうところに華は惹かれるのかもね。本当に、永杜って楽観主義者っていうか」

「何？華の話？」

照の口から上がった名前に思わず反応してしまう。そんな僕に照が「気持ち悪い」と冷ややかな目を向ける。寂しそうな空気はまたいつものからつとした照らしい空気にかわる。

「照は元気になると憎まれ口だね」

「楽観主義者はいいわねって褒めてあげたでしょ」

「絶対褒め言葉じゃないよ、それ」

いつも通りの会話に思わず2人して笑った。それから照は「やつぱり失恋ね」といって席を立ちあがり、そのままどこかへ歩いて行ってしまった。

その細い背中が小さくなっていくのを見ると、この世界に生きている人間の命の形を思い浮かべ、昨日の出来事をまるで夢のように感じた。

こんなふうに落ち込んでも、誰かに励まされ、立ち上がり、歩いていく。

何でもない日常が、実は何でもないわけではないことを、知っている人もいれば知らない人もいる。

そんな世界で生きていたのだと足元のタイルに目をやった。

白いタイルの上に僕の足がある。この地上にたくさんの人間がたっている。

そしてその下には別の世界が広がっている。

「永杜？」

澄んだ声が僕を呼んだ。

「華」

不思議そうな顔をして僕に駆け寄ってくる。

「今日はバイトじゃなかったですか？」

「そうなんだけど」

昨日からずっと華の声が頭の中で響いて、何も手につかない。無遅刻無欠席の僕は初めて友達にシフト交代を頼み、自分の頭を落ち着かせることを考えた。そして華の決まった毎日の行動を思いだして、ここで華を待っていた。

「この後講義とか入ってないよね？」

「え、はい」

「じゃあ、デートしない？」

華の驚いた顔が見たいという理由から待ち伏せまでしていた僕に華はしっかり驚いてくれた。

それから想像していた通り頬を染めてそっと笑うと、僕の隣に腰を下ろした。

「華、行きたいところがあります」

珍しく華がお願いらしいことを言った。

「どこでもいいよ」

特にどこに行こうとか何をしようとか考えていたわけではない。むしろ華の行きたいところへ行きたいというつもりだったので、華から言い出してくれて嬉しかった。

季節は秋、春のように心地いい、暖かな日の昼下がり。

僕と華はたくさんの命が生きる世界に立ち、そっと互いに手を繋ぐ。

周りから見ればただのカップルでしかないが、ただのカップルにしてはあまりにおかしなことをたくさん知っている。

それでも何も変わりはない。

それを華と確かめたかったのだ。

たとえどんなおかしな世界に立っていても、照が失恋して苦しみながらでも歩いていくように、ただこの世界に生まれた命として、2人で手を繋いでいることを忘れることがないように。

僕らはそっと歩いていく。

H* 愛しき金属

夕凧は好きじゃない。けれど、夕凧の作った人間化機械フィオ「T28」は嫌いになれなかった。

優しくて明るくて、まさかフィオだったなんて思ってもいなかった。永杜の大切な友人で、私にとっても永杜以外に親しくしてくれた唯一の友人だった。

「いつまでも友達ごっこはしてられないの」

仕方ないでしょう？、と大学の暖かな中庭に彼女の声が響く。

「冗談ですよ」

「どうして私が冗談いうの？」

「だって・・・、そんな。照は」

「T28、人間化機械フィオ。创作者は夕凧。全部事実よ」

4年前地上世界に上がったのは私だけではなかった。真実に触れる者である桜井永杜のそばで調査することを目的に毎日を過ごしていた私のすぐそばで、そんな私と永杜を観察していた人間、いや、機械がいたなんて。そしてそれが照だなんて、信じたくもない現実。

「貴女、友達いないでしょ」

高校に入って半年ほどたったころ、グループ活動の長い授業を終えた休み時間。照が私にそう話しかけてきた。人間関係がどうしても浅くなってしまい、クラスになじめないでいた私はどう答えるべきか悩んだ。彼女は待ちきれずといった感じで言葉をつづけた。

「適当に領けばいいのに。真面目すぎるのよ」

何でも正直に言ってしまう彼女は珍しく人に好かれていた。珍しくというのはいつか何かの授業で地上の日本人は曖昧というものを好み、自分を否定するものを集団となって排除する傾向ありと教わっていたからだ。その点でいえば、彼女は嫌われることはあれど好か

れることなどないはずなのに、何故か友人がたくさんいて、クラスの中でも目立つ存在だった。

「私と友達になりましたよ」

突然だった。

「え？」

「嫌？」

嫌というわけではないが、私が地上にやってきたのは桜井永杜の調査のためであり、決して地上の学生生活を楽しむためではない。私はまた悩んだ。そして彼女はふっと笑いをこぼして私の手を握った。「適当に頷けばいいんだってば。まあ、真面目なのは華のいいところだけだね」

照は簡単に私の名前を呼んで、私を簡単に頷かせた。

周りの誰が何を言おうと彼女は聞く耳を持たず、「私は華が好き」と笑ってくれた。

私にとって、たった1人の友人だったのに。

「私の目的は桜井永杜を夕凧のもとへ連れて行くことだった。この間、それを彼が拒んだでしょ？だから私に新しい命令が追加された。桜井永杜の恋人となり、H U O 6から彼を奪い取ること」

私はまた何も言えない。

「でもね、華」

そしてまた彼女は簡単に私の名を呼んで、そつと言った。

「記憶を消去されることがない限り私は華の友達なの。友達から、大切な人を奪うことなんてできない。華なら私の気持ち分かってくれるでしょ・・・？」

フィオをメンテナンスによって少しずつ外見を変えて、年を取っているように見せることはできる。創作者または管理者ならば記憶を消すこともできる。けれどフィオとティオには決定的に異なる点がある。

それは人間化機械フィオは与えられた命令に背くことができないことだ。

命令を与える側にもいろいろと規則がある。たとえば命を殺めるような内容や他に外傷を与えるような内容の命令は禁止されている。それを破るような命令には従わないようにできているが、それ以外の命令において、フィオが創作者または管理者の命令を無視することはできない。

「奪い取るようにと命令されたフィオが命令に背くことはできないのです、照」

それが全ての答えだった。

私の友人となったのも、永杜の友人となったのも、全て計画にそった行動でしかなく、そこに照の意思などないという事実がただそこに残される。

私に嘘までついて、彼女は命令に従う。私が友達のために譲るという人間的感情を持ち合わせていることを計算した上での行動に目が熱くなる。

「私は夕凧が嫌いです」
大嫌いです。

「それは夕凧が貴女を裏切るようにと私に命令したから？」
精一杯の思いを口にして私はそれ以上なんと言えいいのかわからなくなつた。

「華は夕凧が嫌いなだけで、私を嫌えるはずない。そうでしょ？」
そうだ、その通りだ。どれほど過去の記憶を思いだし、全てが計画のもと、照によって作り上げられたものでも、そこにあるのが全て嘘でも、私は照を嫌いになれない。

あの日、人に嫌われながら人を嫌えない私の名を呼んでくれたのは照だった。

そこに照の意思などなかったとしても、私はあの声をなかったことにはできない。

「華だつて私と同じ裏切り者じゃない。」

照はいつもそうだ。思っていることをはっきり相手に伝えることができる。それはやはりとても羨ましいところでもあり、とても苦手なところでもあった。

永杜を譲ってしまえば照とは友人でいられるのかもしれない。私にはもう永杜に関する命令はなされていない。命令に従うすべしか持たない照を助けるためだったと言えば、きつと黄昏は私を責めたりしないだろうし、私が夕凧と会うこともなくなるだろう。

彼女は永杜を乱暴に扱うようなことはきつとしない。私がただ頷いて、永杜を手放せば全ては上手くいくに違いない。そう。適当に頷けばいいという、ずっと昔の照の助言通りにしていればそれで。

けれど私の中にはちゃんと答えがあるのだ。

どう答えるべきかに悩んでいるだけで、ちゃんと

答えはもっていた。

そして今も、あの日の照の言葉に包まれて、私は答えを抱いている。

「頷くことは簡単です。けれど照が言いました。真面目なのは華のいいところだ、と。だから照。私は貴女に永杜を譲ることはできません」

照の顔が一瞬泣きそうになった。機械は泣かない。だから照が泣くことはない。

けれど泣いてしまうのではないかと思うほど、照は哀しそうな目をして私を見つめていた。

「私が頼んでも？」

「誰に頼まれても、たとえ命令されたとしても私は永杜の隣だけは譲りません」

それは機械ではなく人だからこそできること。唯一ティオに与えられた欠点。

それを堂々と行使する私に照は黙り込んだ。

その静かな空気の中にできるだけそつと言葉を漏らした。

「照の言うとおり、私も裏切っていたのかもしれませんが」

初めて永杜に話しかけたのは恋人になるという計画にそったもので、初めのうちはただ恋人になることとすっかりと調査することだけが目的だった。それが永杜を傷つける行為であることは否定できない。

「けれど永杜を恋しく思っただのは私です」

他の誰でもなく、私自身が永杜を恋しく思い、恋しく思う相手に永杜を選んだ。

指令を受けて行動していた私と照は同じだ。喜べと言われれば喜び、悲しめと言われれば悲しむ。

けれど恋しく思えという命なしに、私は永杜を恋しく思った。だから照もそうであってほしいと私はそつと照の手を握った。あの日、照がそうしたように。

「私の手を握るようにという命令はなかったのではありませんか」それが何よりの答えだといい。そう思いながら見つめた先にいたのは、あの日のように優しく微笑む照だった。

「ねえ、覚えてる？昔、華がロボットが主人公の人間を守る映画を見て言った言葉」

本当に照はいつも脈絡というものがない。内容を聞いてすぐに照の好きな映画だということは思い出したが、その先の私の発したどの言葉を探していると、やはり照は待ちきれずに笑いながら続ける。「私が『ロボットに感情なんてあるわけないじゃない、ただの金属なんだから』って言ったなら『私はあると思います』って」

そういえばそんなことがあったかもしれない、と映画館の外の景色を思い浮かべていた。

高校の近くにある小さな映画館で、照はその映画を私と何度も見に行った。

「私ね、嬉しかった」

やはりロボットには感情がある。

「私のあたりです」

「そうね」

何でもない日常に戻ってきた気がした。そこは人の少ない昼前の大学の中庭で、秋風が優しく吹く、暖かな1日。あと1つ講義を受けたら今日はもう終わりで、いつも通り学内にあるカフェに行き、お昼をとる。

「髪でも切りに行こうかな」

照の長い髪が風に揺れる。

「照はいつもいきなりですね」

私よりもずっと人間らしい彼女は嬉しそうに笑う。

「華、知らないの？人間って失恋すると髪をばつさりきるのよ」

それもどこかで聞いたことのあるような話だった。ただの都市伝説のようなものだと思っていたが、事実だったのかと驚く。そして失恋というキーワードに思わず聞き返す。

「失恋ですか？」

「永杜を奪えなかったから。それに、永杜に華をとられちゃったものの」

ああ、やっぱり。私は照を嫌いにはなれない。

命令には背くことのできない照に頼まれても永杜を譲らないということは、永杜を選ぶということになってしまふのだろつかと思うと少し寂しい気がした。どちらもというわけにはいかない世界であることは分かっている、明確にこちらと選ぶのは困難だ。

「ま、永杜を奪えなかったのはいいの。命令には従った。その結果失敗したんだから、私にはもう関係ない。ねえ、華。私がもしもまた永杜を奪いにきてもちゃんと永杜を選ぶのよ？」

選ぶという言葉は好きじゃない。選ぶという行為は得意じゃない。選択しなんてないほうがいいけれど、選択肢のないものがあるから、私は彼らの代わりにそれをしなくちゃいけない。

「いつだって、どこにいたって、華だけはちゃんと自分の中にある答えを選んでね」

私の中にはちゃんと答えがある。

「はい」

永杜が隣にいてくれるならきつと、私は私の中にある答えをちゃんと失わずにいられる。だから選ぼう、誰も捨てずにすむ道を。

T* 機械の願い事

「で、失敗したっていう結果を持って帰ってきたの？」

私はこの人に弱い。私は決して創作者だけには逆らえないように作られているから。

規定で禁止されている以外の命令に、背くことは許されない。

しかし初めて、命令に逆らった気がした。

「夕風はどうして華を嫌うの？」

大切なものが多くて困ってしまうと、昔永杜が言っていた。

その時は大切なものなんてなかったから、よくわからなかったけれど、今はよくわかる。

私は夕風も華も大切だ。そう思う心が創られたものだとしても、複雑なことに私はそう思う。

「華を嫌いなんじゃないわよ」

知ってる。

「黄昏さんが創ったから？」

夕風は黙り込む。私はそんな夕風の姿を誰かに見せてあげたくて仕方がない。

泣きそうな目を床に向けて、何かに耐えるようにうつむく彼女のその姿を、誰かに分かってほしい。

『私は夕風が嫌いです』と華は言った。

人の好き嫌いが少ない彼女がそう思うほど、華にとって夕風は困った存在なのだろう。

けれど私にとってはとても大切な人なのだ。彼女の内側はとても心地いい。

「ごめんね、T28」

ぼそりと消えてしまいそうな声が言った。

確かに私は華が大切に、華を傷つけなければならぬようなことを命令されるのは困るけれど、そう分かっているにも命令せざるを得な

い夕風の気持ちが分かるから、実行に移す。

大切なものが多いと困る、というのは本当だ。

けれど私が困るだけで全てが上手くいくのならそれでいい、そうはいかないから大変なのだ。

夕風は決して、私たち機械を壊さない。

いつも「ただの機械」だと散々言っているくせに、他のどの研究者よりも優しい。

私は一度捨てられた機械だから、人に捨てられる感覚も、焼却炉から私を拾ってくれた夕風の優しさも決して忘れることはできない。目覚めたとき綺麗な体で、信じられないほど動きやすい空っぽの設定のまま、夕風という人間を視界に映した。

「起きたみたいね」

起こしてくれたのは貴女でしょう。そう心の中でつぶやいたはずが、音になって出て行った。

そのことに驚きそつと音が出て行った場所に手を当てる私を夕風が笑った。

「人間になったのは初めて？」

「フィオ」

どこかでそんな高度な研究をしていると聞いたことがあった。総合研究所というベースメントポリス最大の研究施設の一角で、機械を人間にしたり、人間を機械にしたりといった、おとぎ話のような研究をしていると。

「そうよ、貴女はフィオ。人間化された機械T28」

それから私は人間化を強化すべく、たくさん訓練をした。心の中で思ったことを言葉にしないように、作り笑いをうまくできるように、誰にでも好かれるような人間になるように。

決して人にはなれないけれど、それでも夕風は私をまるで人のように扱ってくれた。

まるで妹のように、大切にしてくれた。

そんな彼女はずっと、自分が欲しいもの全て兄である黄昏さんに奪われてきたと話してくれたことがあった。酔いに任せて心の中にため込んだものを吐き出しているようだった。夕風が捨てたくても捨てられず、そんなふうに抱えているものを、少しでも受け止められたいと思った。

天才の黄昏、秀才の夕風。

総合研究所の研究者たちの間ではそう呼ばれる兄妹。

そしてその言葉が周りの評価として彼女をさらに追い詰める。陰では秀才は天才に敵わないと笑うものもある。確かに黄昏さんは今期最高のテイオも創りだし、過去最高のフィオも創り出したという。研究者たちのなかでもテイオとフィオの両方を創れるものはほとんどいない。いたとしてもかなりの高齢で実践の場には立っていないものばかりだ。

彼の若さでその実力をもつというのは努力だけでは不可能なのかもしれない。けれど夕風は幼いころから兄と比べられ、不出来だと言われ続けた結果、努力の夕風と呼ばれるまでになり、今では黄昏さんの次に優秀な研究者だとさえ言われている。ただ、そこにある差ははかりしれない。

全てを奪われたから、彼から何かを奪いたい。

そんなふうに思う心があることも私は知っている。私にはそれがいけないことだとは思えなかった。

彼女は何を言われても決して泣かない強い人だけれど、優しい人は皆強く、それと同時に皆脆い。

だから私だけは彼女の味方でいたいのだ。最後の1人となっても、この身をささげて彼女を守りたい。

地上世界でも地下都市でも、どうか私の大切な人が幸せでいられま

すように。

それはあまりにも難しい、私のたった1つの願い事。

丁* 機械の願い事（後書き）

照は人間に好かれるように作られたけど、人間が大好きな子だから、とても大変っていうお話。

E* 平日のプロポーズ

華の機嫌はすこぶるよかった。

僕の体調はすこぶる悪い。

行きたいところがある、とめずらしいことを言うから僕は嬉しくな
って華に手をひかれるままついてきた。どこでもいいよと言った手
前、見慣れた建物が目に入ったあたりから何となく嫌な予感はして
いたが、そこで引き返すことなど華の嬉しそうな顔を見るとできる
はずもなかった。

そしてその嫌な予感は的中し、今に至る。

「ずっと見たかったのです」

まだパンフレットを眺める華の目はうつとりとしている。

確かに映画の宣伝を見たときから華は僕に楽しみです、と言ってい
た。

「永杜は本当に何も食べませんか？」

「うん、今は・・・ちょっと」

僕はまだ主人公の腕がもげる映像が頭から離れず、とてもじゃない
が何かを口に入れる気分にはなれなかった。こんなことになるのに、
華はいつも僕を誘ってくれる。そしていつもこんなことになると思
って、僕は彼女の隣に座る。

彼女が僕と観ることを選んでくれた喜びを時折忘れそうになるけれ
ど、他の誰かではなく僕を選んでもくれることが僕は嬉しい。それだ
けではない。僕は我慢ではなく、彼女が楽しいと感じるものを僕も
隣で一緒に感じていたのだ。華が嬉しそうにしていたり、僕が泣
きそうになるのを心配しながらも頬を染めて見つめてくるのを、一
番近くで見たい。

そう思うとふっと内から笑みが零れ出る。

「何がおかしいですか？」

「おかしいっていうより、なんだろうな」

「楽しい、ですか？」

「うん、そうなんだけど」

フライドポテトを食べる華が首をかしげる。

「今何となく思ったんだ。もし、華と出会ってなかったら、僕はこういう映画やドラマをさ、見ることもなく死んでただろうなって」

きつとそれは僕にとつて限りなく平和な世界に違いない。華と出会う、他の女の子の隣で、ホラー映画を怖がる女の子の隣で平気なふりをして強がって、それ以降はその子のためにと言いつくしてホラー映画を封印して生きていたと思う。

けれどそんな世界はきつと限りなく退屈な世界に違いないことを僕は知っている。

「それはありません。永杜はきつと華と出会っていなくとも、いつか他の誰かと観る可能性が大いにあります」

「そうかな」こんなに頻繁に好き好んで、と笑ってしまう。

「はい」華の目はいつになく真剣だった。

「そもそも、華に教えてくれたのは永杜です」

「そうだった」

「はい」

それでも、こんなふうにまた観たいと思うのは、隣にいるのが華だからだと思うんだ。

そんな僕の中で揺れている不安に、僕はふと疑問を抱いた。

僕は何の不安も感じてなどいないはずなのに、確かに内にあるコレは誰の不安か、そう思った。

僕の不安ではなく、華の。

真実。

僕は華の内にある真実に触れていた。

もしも、と思ったのは僕ではなく華だ。そう思ったとたん、僕は自分の内側に溢れるものに言葉を失った。

声でも音でも映像でもないそれは、とめどなく僕の内いっばいに広がって、響いていく。

「違、う。そうじゃない。」

永杜は華と出会わずとも、誰かと楽しく笑っていただろう。

永杜は華を好きにならなかったら、普通の人生を過ごせただろう。

永杜が華以外の誰かを好きになっていたら、華は永杜の隣にはいなかっただろう。

楽しいも、嬉しいも、寂しいも、忘れたままだっただろう。

永杜がもし、華以外の誰かを好きになってしまったら、華以外を選んだら、華は。

「そうじゃないよ・・・」

「永杜？」

僕の名を呼ぶ華に、何と言えいいか分からなかった。

勝手に華の不安に触れたことを申し訳なく思った。自分が怖いと感じた。

心を読んでいるのと同じじゃないか、とうつむき自分の足元を見つめた。華はそれを知ったらどう思うだろう。そんな臆病が僕の口を噤ませる。

嫌われたくないと思う気持ちが、華の不安を否定してやりたいと思う気持ちとせめぎ合う。

「どうしましたか？」

小さな体いっばいにこんな不安を抱えて、その不安を消すために、隣に僕がいるということを確かめるために、僕が華を選んだという確信を得るために、華は僕とここへ来ることを望んだ。

「・・・永杜？」

僕は華の抱える真実に泣きたくなった。

一生、華だけだと誓っても構わないほど、今、僕が華を好きだということはどうすれば伝えられるだろうか。もしもなんて存在しえないことだと、僕は華以外を選ぶ選択しなど持ちえないのだと、どうすれば分かってももらえるだろうか。

華は僕がいなくとも華で、僕も華がいなくとも僕だということ。それでも、僕等は2人だから僕等だということ。

「明日もまた、今日のやつを観に来よう」

華はきよとした顔で僕を見た。

「映画なんて、華が隣で楽しんでいたら何でもいいんだ。逆を言うと、華以外の誰と何を観ても、今日のほど楽しいとは思わないんだよ。華が生きている限り、華が僕を嫌いになっても、僕は華として手をつながない。つなげない」

平日のファーストフード店の端の席で、僕はまるでプロポーズをしているようだった。

しかしそれほどに必死だった。君ばかりじゃないんだよ、と伝えるために。華の不安を少しでも取り除くために。僕の臆病に華は勝利した。

華は驚きながら僕の言葉を理解すると、白く小さな手を僕の手には伸ばして、そっと触れた。

「それなら明日は、永杜が好きなものを観たいです」

僕の中にまた、真実が見えた。

それは華からそっと流れ込み、僕に染み込んで行く。

触れてもいいよという暖かなものと、まるで春の野原に吹く春風のように心地よい、華が僕に向ける愛しいという感情。

僕はただその手を握り返すだけでいっぱいだった。

そして心の中でどうか華にも伝わりますようにと願いながら、彼女に一生を誓ったのだった。

T* 曲げられた真実

— 兄さんに失敗作の気持ちなんて分からない

手に取るように分かるほど思いつめた冷たく重い言葉だったのを今でも何一つ忘れることなくその生々しい記憶に蓋をして、逃げるように戻ってきた現実世界には桜井永杜が心配そうな顔をして立っていた。

「大丈夫ですか？ 起こしたほうがいいのか迷ってたんですけど」

「ああ、平気だよ。最近寝不足なんだよねえ。ちよつと夜遊び減らさなきゃなあ」

最近毎日のようにあの日の夢を見る。冷たくてたまらない、あの日の夢。

気が付くと汗だくになって目を覚まし、息を乱している。

「夕凧さんの夢ですか？」

桜井永杜は申し訳なさそうにそう言っつて、俺が驚いているとすいませんと頭を下げた。

もう覚醒の日は近いのだから、彼の意思に関係なく、真実を見てしまつのは仕方のないことなのに、彼はひどく罪悪感を感じているようだった。

「君が気にすることじゃないんだよ、永杜君。それより夕凧が誰かまで知ってるのも真実が見えたから？」

ずいぶん感じやすくなったのだな、と感心していると桜井永杜は首を横に振っていった。

「夕風さん、この間ここへいらしたんです。その時に」

「来た？・・・ここに、あの子が・・・本当に？」

「え？はい」

夕風がここに来た。

それこそ真実かどうかを疑いたくなることだった。あの夕風が俺の研究室に来たことなど、あの日以来1度もない。そもそもあの子と言葉を交わしたのは、あの日が最後。もうずいぶん昔のことのように思われた。会いに行っても追い返され、彼女の姿を見ることができるのは学会の時だけ。

そんな夕風が俺の研究室に来たのはきつと、桜井永杜がここにいるということを知っていたからだろう。

「喧嘩でも、しているんですか？」

桜井永杜にはどんなふうに真実が映し出されているのだろうか。もしかするとあの日の記憶まで見えているのかもしれない。そして俺の奥にある触れられてはならないこの感情まで。

「すいません、余計なこと・・・」

「いや、いいんだよ。君の質問にはできるだけ答えなくちゃね。・・・喧嘩というより、嫌われてるんだよね」

夕風は俺が兄ではなければ、と幼いころからよくそう言っていた。比べられることに苦しみを感じていることは俺にも分かっていて。だからその苦しみから救ってやれるならと、俺は天才を捨てること

を選んだ。けれどそんな想いが、他の誰からの感情よりも、夕風を傷つけてしまった。

「人は俺を天才と呼ぶけど、天才なんかより秀才であることの方がはるかに優れているんだよ。けど誰も、あの子にそう言ってくれるやつはいなかった。俺が言うんじや駄目だったのに。あの子は俺と比べられて苦しんだ。だから俺は、一番最低なことをしたんだ」

あの頃はそれが唯一の道だと思っていた。

夕風を苦しみから救うためなら、他の何をも厭わなかった。

「全てを捨てたんだ。分からないように少しずつ、俺が天才なんてものを捨ててしまえばあの子はきつと楽になると思った。けど夕風はそんなことを望んでなんかいなかったのかもしれない」

俺の自己満足があの子をきつとひどく傷つけた。

「あの子を傷つけて、俺は何もしてやれない。ただ俺が存在してるだけで夕風は苦しむ。それでもやっぱり」

夕風だけは、捨てられなかった。

「黄昏さんは、夕風さんを愛しているんですね」

それはまるで俺をすっぱりと呑み込んでしまうような言葉だった。

「・・・妹、だからね」

それ以上でも以下でもない。

俺はそれをよく知っている。あの子がどんなに俺の妹であることを

呪っても、俺がどれほどあの子の兄でなければと願っても、夕凧は俺の妹だ。

「妹ってそんなに、大切なものなんですね」

「ああ」

とても、とても。

初めて会ったときから、まだあの子が目すら開いていないときからいやむしろ、あの子が母のお腹の中に小さな光として生まれたときから、俺が兄であることは決まっただけで、俺はただその命がそこに存在しているだけで幸福を感じられた。

「僕も華がとても大切です。黄昏さんの内にあるそれは、華が僕にくれるものとよく似ていて、とても・暖かい」

HU06と桜井永杜は兄妹でも、姉弟でもない。

そう、だから似ているのだとすれば俺が夕凧を想う気持ちがHU06が桜井永杜を想う気持ちと似ているのだろう。それはきっと真実だ。

けれどこの世界には、知られてはならない真実がたくさんある。誰かが隠そうとする重大な真実を真実者たちが見て聞いて語り、そして桜井永杜が触れて暴かなければならないことがたくさんある。

それと同じくらい暴く必要のない真実だってたくさんある。

世界は広い。

真実を暴く真実者たちがいるように、それを曲げる者だって存在する。

「永杜くんには妹がいなかったよね。だから似ているように感じるだけじゃないかな」

暴くべきものではない真実を曲げるために。

「そう・・・、ですかね」

「そうなんだよ。妹っていうのはとても愛おしいものだからね」

知られてはならないこの感情を、夕凧には伝えることさえ許されないこの真実を、俺は今もこれからもずっと曲げ続ける。

「そうかもしれませんが。変なこと言いました」

世界はそう簡単には創られていない。

丁* 曲げられた真実（後書き）

実は黄昏さんね、すごい力と感情をこっさり持つてるんですよって
いってお話でした。

E* 優しい真実

黄昏さんは僕と華をベースメントポリスに呼ぶと、突然カードをひらりと見せて言った。

「今日はお出かけ日和だね。ってことで通過許可証をとったので第1区に行こう」

とても陽気な彼に華が僕の腕を強くつかみ、引き寄せた。

「あんなところに永杜が行く必要性はありません。黄昏1人で行ってきて下さい」

それはまるで威嚇しているようで、その第1区と呼ばれたのが何なのか、不思議に思っていると黄昏さんが手に持つカードを僕に手渡して説明してくれた。

「怪しいところじゃないよ。H U O 6には少々誤解を与えちゃってるんだけど。研究施設を集めたここは第5区で、隣の第4区は教育機関を集めた区なんだ。第4区と第5区間の移動は自由なんだけど、区間移動に許可証が必要なのがあるんだ。第1区に入るにはどこの区からもそれが必要なんだよ。そのカードは地上で言うところのビザみたいなもので、第4区と第5区はE Uみたいなものだね、簡単に言えば。で、今日行く第1区は一番人口の多い商業の区。可愛い女の子がたくさんいる店もあるし、市場や飲食店もすべて第1区にある。永杜君にこの世界で生きる人々を見せてあげようと思っただんだ」

華はまだ警戒していた。

「永杜君を女の子のいる店には連れて行かないって」
どうやら華にとって第1区は歌舞伎町のようなイメージがあるのだろう。黄昏さんはよくそこへ行くのだろう。華は第1区へ出かけていく黄昏さんの姿にそう感じたのだろう。ふと考え始めると僕の内は真実でいっぱいになっていた。

「行こうよ、華。華もまだ行ったことがないんだよ」

華は少し悩んだあと、小さくくくんと頷いた。

その日、ベースメントポリスの上空たるものは確かに雲一つない晴天だった。

僕が「いい天気でよかった」というと華と黄昏さんが同時に笑い声をこぼして僕を見た。

「永杜は何も知らないんですね」

「バーチャルだよ。第5区に雨が降るのは月に1度、決まった日だけなんだ。第1区なんて半年に1度しか降らないしね」

「地下から空が見えるなんて変だとは思ってたけど、だから門の向こうからただの白いドームに見えるのか」

「バーチャルは区間ごとだけですから」

地上の人が知ったら驚くに違いなことをこうもすんなり受け入れられるのも真実に触れる力のおかげだろう。

僕と華は黄昏さんにつれられるままメインタワーの1階部と呼ばれる場所に来た。そこはまるで東京の地下鉄ホームがすっぽりと入って浮かんでいるようだった。電車に似た乗り物は皆宙に浮き、ホームに上から降りてくる。降りる瞬間にだけ光るレールのような筋が綺麗だった。

そして僕は初めて、ここで生活している人々を目にした。制服のよくなものをきた学生らしき人やスーツを着た社会人のような人、見たこともない奇妙な服を着た人がその乗り物にすいこまれるように入っていく。それは未来の東京の地下鉄ホームに立っているような気分だった。

「すごい・・・」

「俺の友達がここを構想するのに携わったんだよ。空間軌道っていう分野の専門家。第5区にはこのベースメントポリスの文明発達にとても重大な役割を与えられているんだ。」

「この空間軌道のもとになった軌道学を発達させたのは黄昏です」
華は嬉しそうにそういった。僕が考えているよりこの世界ははるかに大きくたくさん命であふれ、僕が思っているより黄昏さんはす

「ごい人間のようだった。」

「軌道学はもともと遅れていたからね。他との関連性を持たせるとすぐに役立つ分野だったただけだよ」

だからそんなにすごいことではない、と黄昏さんは笑った。宙を流れていく文字を見ながら、続けていった。

「そんなことより、軌道学を応用してこんなふうにな人を移動させることができると思った人間がすごいよ。俺には思いつかなかった」それは今までよりもずっと愛しいそんな声だった。

「夕風です」

華が僕に言った。

「空間軌道を用いた移動手段を提案したのは夕風です」

だから彼はすごいといった僕に嬉しそうに笑いかけたのか。

『妹っていうのはとても愛おしいものだからね』

そう言った黄昏さんの声はどこか冷たかった。しかし今、彼から感じられるのはとても暖かなものだだった。

『ただ俺が存在してるだけで夕風は苦しむ』

黄昏さんはそう言ったけれど、もし黄昏さんがいなければ夕風さんが研究者になることはなかったかもしれない。こんなふうにな人と場所を繋ぐものもなかったかもしれない。

「黄昏さんと夕風さんのどちらが欠けてもできなかった、2人の合作ですね」

夕風さんにとって黄昏さんが、自分を苦しめる存在だったとしても決してそればかりではないことをこの場所は告げている気がした。もしかしたら彼女はそう思っているのではないかとさえ思った。もしも本当に比べられることを苦に感じ、黄昏さんの存在を感じたくないのなら、彼の歩む道を追ってくるなどしないだろう。全く関係のない世界で生きることでもできたのに、彼女はそれをしなかった。

「夕風さんのところへ行きましょう」

彼女は逃げずに、研究者となる道を選んだのだ。

「え？」

「永杜？」

それこそが答えのように思えた。

「真実は哀しいばかりではない気がするんです」

「何の話ですか？」

華が首をかしげ、僕と黄昏さんを見つめる。

「きつと今なら」

始まりはほんの小さな想いだっただ。兄の凄さに己を蔑んでしまった脆さと、ただ妹を大切に想う不器用な優しさが、2人をここまで連れてきてしまっただけ。

今ならそれは、そつと溶け合うことができるかもしれない。

「会いに行きましょう」

そこにあるのはきつと、2人を囲う感情が隠してしまった優しい真実。

Y* 七色の絵本

「夕風さん、お客様がいらつしゃいます」

ふとクリーム色の扉のほうに目を向けて穏やかに彼女はそう言った。眞実を見るものである少女、暦様（いよろぎ）は現統都の末娘であった。

「今日は体調もよさそうですから、少しならお出かけされても大丈夫ですよ」

本来なら第4区で勉学に励む年頃である彼女が第6区にいるのは、お体が弱く外で過ごすのは難しいからだ。幼いころからずっと機械に囲まれ、病室で過ごしてきた彼女が眞実を見る者として覚醒してからは少しずつ体力もつきはじめ、今では総合医療棟とメインタワーの上部にある特区と呼ばれる場所を歩いて回れる日もあった。

お嬢様であり、末娘である彼女にはそういう雰囲気がなく、誰にでも気さくにお話なさる暦様は人に好かれる人だ。そんな彼女のもとを訪れる人はたくさんいる。その日も誰かが来る未来という眞実を見た彼女の言葉に私は暦様のお客だと思いそう言つと、彼女はその眼を私に向けていった。

「いいえ、夕風さんのお客様なんです」

「・・・私の、ですか？」

「はい。私もお会いしたいな。そうだ、夕風さん。あと少しここで私とお話して下さいませんか」

可愛らしい彼女の願いに私は首を横に振ることなどできるはずもなく、そばに腰かけた。

「暦様は本当に人が好きですね」

許される限りの時間を、人と過ごそうとする彼女はきっと体さえ丈夫であれば、他の女の子よりずっと活発な子だっただろう。元氣になつたらあれもしたい、これもしたいと目を輝かせてお話しされる

姿はとても生き生きしている。

「皆さん、とても優しいから。私はここでこんなふうに着てお話することしかできないのに、たくさんのお話を教えて下さるんです」
彼女は羨むことも妬むこともせず、彼女のもとへ通ってくる人にも
つもありがとうございますと微笑む。

人はその笑顔を見られるだけで、まるで天使に触れたような気分になれるのだ。綺麗という言葉があまりにも似合いすぎる彼女はふと何かを思ひだし、そつと頬を赤く染めた。

「最近ね、戒さんがよく来て下さるんです」

「かいつて、真実を語る戒ですか？」

「はい。戒さん、いつもご本を下さるんです。それも幼子を読む、とても可愛い絵本なんです」

「絵本、ですか？」

いくら十分な教育を受けてないといえど、彼女だつてもう16だ。中等部までの文字なら読める。馬鹿にしすぎではないか、と私は心の中に小さな怒りを感じた。

「暦様はお優しくしますよ。嫌なことはきちんと相手に告げるべきだと思います。もしかすると戒も、わざとではなく気遣いになっていないのかもしれませんが」

語り手と呼ばれている戒は普段、ほとんど口を開かない。どんな人間かと思っていたがまさか、この優しい暦様にそんなことをするよ
うな人間だったとは。

私がそんな風に怒りを見せると、暦様はきよとした目で私を見て、首をかしげた。

「嫌なことですか？」

「・・・嫌ではないんですか？そんな・・・、馬鹿にされて」

私の言葉に彼女は目を丸くして、それはそれは優しく穏やかな笑みを浮かべると、小さく首を横に振って言った。

「最初は本当に私が字を読めないのだとお思いになって、絵本を下さつたんです。けれど私が文字を読めることをお話しすると、戒さ

んは私に今度からはきちんと本にするから許してほしっておつしやっただんです」

そつとその時を思いだしながらお話しする暦様はいつもとは少し違った恥ずかしそうな表情で言った。

「確かに文字が読めない幼子と思っていらいしたのは、馬鹿にしているといえるのかもしれませんが。でも私はその絵本がとても嬉しくてたまらなかつたのです。私のことを考えて選んでくださったそのお気持ち、嬉しかつたのです」

それは心の内から溢れるような、春に似た暖かな声だった。

「だから次も、次もご本を持って来ていただけなら絵本が読みたいです、と我儘をいってしまいました。戒さんが持ってきて下さる絵本はすべて外の世界に溢れる色がたくさん詰まっていてとても素敵なんです」

外の世界を知らない彼女に、彼は色の溢れるそれを選んだ。それはとても優しく暖かな心だと思った。

私ならそれを、捨ててしまったかもしれない。そう思った。そこに在る想いになど決して気づくことはなかつただろう。

「私は暦様のようにはなれませんか。馬鹿にされたように感じるなんて」

そう言つたとき、私の中で泣き叫ぶ声がした。

『兄さんに失敗作の気持ちなんて分からない』

それは兄である黄昏に言つた最後の言葉。あれ以来言葉を交わすどころか、顔も見えていない。

「私は夕風さんのようになりたいけれど、とても難しいです。たくさんのお役にたてるというのはとても素晴らしいことです。夕風さんはいつだって見返りもなしにこうして人に寄り添うことで

きるお優しい人だと思えます」

私よりずっと幼い天使が白いシーツの上でいつになく真剣な声でそう言った。

まるで天使のような彼女はきつと人を愛する神の使者に違いない。神に愛された人の子だと思わずにはいられないほど美しかった。

「あ、ほらっ。お客様です」

天使はぱつといつもの活発な少女になり扉に目をやった。

コンコンと軽いノックが響き、私はそつと立ち上がる。

誰だろう。

そんな風に考えながら開いた扉の向こうに立っていたのは、とても不安そうな、むしろ泣きそうな顔をした、兄、黄昏だった。

もう何年もこんなに近くに寄ることさえなかった兄が、下唇を噛みしめてじつと私を見下ろしてくる。

「ゆうな、ぎ」

ずっと聞いていなかった彼の声はあの日と全く変わっていないかった。少し震えて響くその声に、もしかする私は兄のくれた絵本を、たくさん色が、想いがつまったそれをあの日、捨ててしまったのかもしれないと思った。

本当はただ優しいばかりのものを、私は。

「兄さん」

もう2度と、呼ぶことはないと思ったあの日。

憎しみや悔しさばかりが覆っていた私の中に、あの日の兄の顔が浮かぶ。

嘘だと言いたくなった。

ずっと、ずっと私ばかりが苦しんでいたはずなのに。思い出される

兄の顔は全て、心配そうなものばかりで、私を苦しめている彼はずっと何かに悩んでいたのだと、そしてそれは私のことなのだと思うずにはいらなかった。

いつも、周囲は私と兄を比べて私を非難したけれど、今思えば1度だって兄さんが私を非難したことなどなかった。兄さんから与えられた傷など、何ひとつなかったのに。

私は兄から与えられたものを、勝手に刃物に変えて傷ついた。

「夕風」

私の名を、私の表情を伺いながら呼ぶ彼に、私を傷つけることなどできるはずもないというのに。

ふと気づくと兄の向こうには桜井永杜とH U O 6がそっと寄り添うようにして立っていた。真実に触れる者である桜井永杜はきつと、私が己の弱さに愚かさに気付くことを知っていたのだろうか。知っていて彼をここまで連れてきたのだろうか。

だとすれば曆様があの絵本のお話をなさったのは、それが見えたからなのだろうか。

真実はただ彼らに告げたのだろう。

私の弱さと彼の優しさが今ならちゃんと向き合えることを。

Y* 過ちの日

「お兄ちゃんはできるのに、どうして夕風はだめなのかしら」

幼い頃、その言葉はいつも兄を私に縛り付けた。

父も母も、できた兄を見ていたばかりに、私があまりにも不出来だと思わずにはいらなかったのだろう。兄は何をさせてもすべてを完ぺきにこなしてしまえる人だった。勉強だけではなく、全てにおいて彼は完璧だった。私が努力したところで、彼には遠く及ばず、いつだって私は不出来だと言われ続けた。

そんな言葉に慣れてしまっても、私の中に負け続けても構わないと思う気持ちはなく、いつか必ず勝って見せると思っていた。

周りの人間は皆、陰で私を笑っていた。

あれだけ頑張つてあれか、失敗作だ、と笑った。

ついに父と母までどこで間違ったのかと言った。

兄がそこにいると私はいつだって失敗作だった。

そんなある日、私はその成功作である兄に勝った。

「最優秀賞・・・」

それは兄も出展していた研究発表のことだった。

ようやく兄を抜いた。ようやく勝った。これでもう失敗作ではない。これで胸を張って、黄昏の妹だと言える。認めてもらえる。そう思った。

しかしそんなはずはなかったのだ。

それに気づいたのは兄の出展作品、私の目には誤魔化すことのできない改造作を目にした時だ。

兄が中等部のころに作ったものとほとんど変わらなかったそれは、当然教授となった私に勝るはずのないものだった。

それを見た瞬間、兄が何を考えそんなことをしたのかが手に取るように分かった。それから彼はあらゆることを疎かにし、誰もが天才も結局はただの人だと笑い始めるまで失敗し続けた。落ちぶれた天才を完璧に演じていた。

「夕凧は偉いね」

そんな時、彼は私にそう言った。もうその時の彼の表情など覚えていないが、とても穏やかな声に私は自分の手を握りしめ、じっと耐えるように兄の言葉を聞いていた気がする。

「努力は天才なんかよりずっと優れた才能なんだよ。」

「誰も気づかないだけで、天才なんて秀才の足元にも及ばない。」
兄さんはそう言った。

そんなことを貴方には言われたくない、と心の中で叫んだ。手を抜いて、わざと私を勝たせて、そんなことで私が満足すると思ったのか。そんなことで私が喜ぶと思ったのか。そんなことをしなければ私は勝てないと思ったのか。

いつだって私のすぐそばで励ましてくれていた兄のその行為は私にとつて裏切りだった。いくら頑張っても無駄だと、勝たせてやるから素直に喜んでいると、そう言われている気がした。

「いいかげんにしてよ」

誰の何よりも、兄のその行為が私は哀しかった。兄さんだけは私の味方だと思っていたのにずっと嘲笑っていたなんて、と思わずにはいられなかった。

「兄さんが手を抜いたことで勝って喜ぶほど、私は馬鹿じゃない。いつもそんなふうに乗っかってたの？勝たせてやらなきゃ、私は一生兄さんには勝てないって。ずっと・・・、馬鹿にして笑ってたんですよ！」

その言葉に彼がどんな表情をしたのかは、分からなかった。涙でいっぱいになった目は全てをぼかして映した。私は生まれてからずっと与えられ、どこに逃すこともできずにいた苦しみを兄にぶつけるように言った。

「兄さんに、失敗作の気持ちなんて分からない」

Y* 真実の腕の中

「ずっと、謝りたかった。夕凧をあんなふうに傷つけてしまったこと。俺は何もわかってなかった。夕凧がどんな気持ちで、生きてきたか。俺に勝ちたいと思っていてくれたんだよね、ずっと」

兄さんの声は待合室に震えて響いた。喧嘩をした後いつもこんなふうに声を震わせて謝っていたなと遠い昔の、それこそまだ誰の言葉に惑うこともなかった無邪気な子供のころを思い出した。

そしてその喧嘩さえ、いつも一方的に私が怒りをぶつけていただけだということも。

「夕凧は、競わされているだけで本当はもつと自由に生きたいんだろうと思ってた」

そう思ったこともあったかもしれない。

「勝たせてあげたかったわけじゃなくて、ただ解放してあげられると思ったんだ」

それはきつと嘘ではない。私が彼を拒絶するようになったあの日以来、彼は決して手を抜かず、天才の名を持ち、私に勝ち続けた。私が勝ちたいと思っているなら向かいたってやると告げていたのだと今ならわかる。あのころはそれさえも、私に対する力の差を見せつけて、やはり馬鹿にしていると言っているのだと思っていた。

勝ちにいく私に立ちはだかった彼の中にあつたのは、本気でやってやろうという優しさだった。

そこには勝たせてやろうなどという思いは全く感じられたなかった。

だからきつと、兄さんは本当に私を、あの苦しみから解放したいと思っただけなのだろう。

「本当にごめん」

兄さんが与えてくれるのはいつだって私のためのものだったのに。

『私のことを考えて選んでくださったそのお気持ちが、嬉しかったのです』

そう言った曆様の気持ちが今ならよく分かる。

兄さんさえいなければ失敗作だなんて言われずにすんだのに。黄昏が兄でなければ、苦しみことなどなかったのに。ずっとそう思ってきた私の中の脆さがずっと剥がれていくような気がした。

私が苛められていた時も、人を責めることは苦手なくせに必死になつて守ってくれた人。

私が作ったものを全て捨てずにいてくれる人。

どれほど私が不出来でも、ただ1人ずっとすごいと認め続けてくれていた人。

「貴方が兄でよかった。貴方の妹でよかった」

今なら心からそう思える。

「私こそ、ごめん」

ごめんだなんて謝ったのはいつぶりだろうか。

そう思った私を兄さんの大きな腕が包み込んだ。

「仲直りだ」

低い声。

震える腕。

暖かな温度。

その中にじんわりと溶かされた喜び。

「そうね、仲直り」

思わず笑ってしまうほど、弱弱しい兄の胸に頭をとんとあてた。

思い返せばただの兄妹喧嘩だったのだな。

そう思った私は気付くといつぶりか、心からの笑みをこぼしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0358q/>

コイビット 【statice】

2011年4月16日15時07分発行